



繪本忠臣藏  
後七篇

中村進午文庫  
文庫5  
702  
17





繪本忠臣蔵後篇卷之七

○堀井妻子賞花遇危難

○花園 ○其二

○林謀寺田謁約所會處

○花園

以上

繪本忠臣蔵後篇卷之七

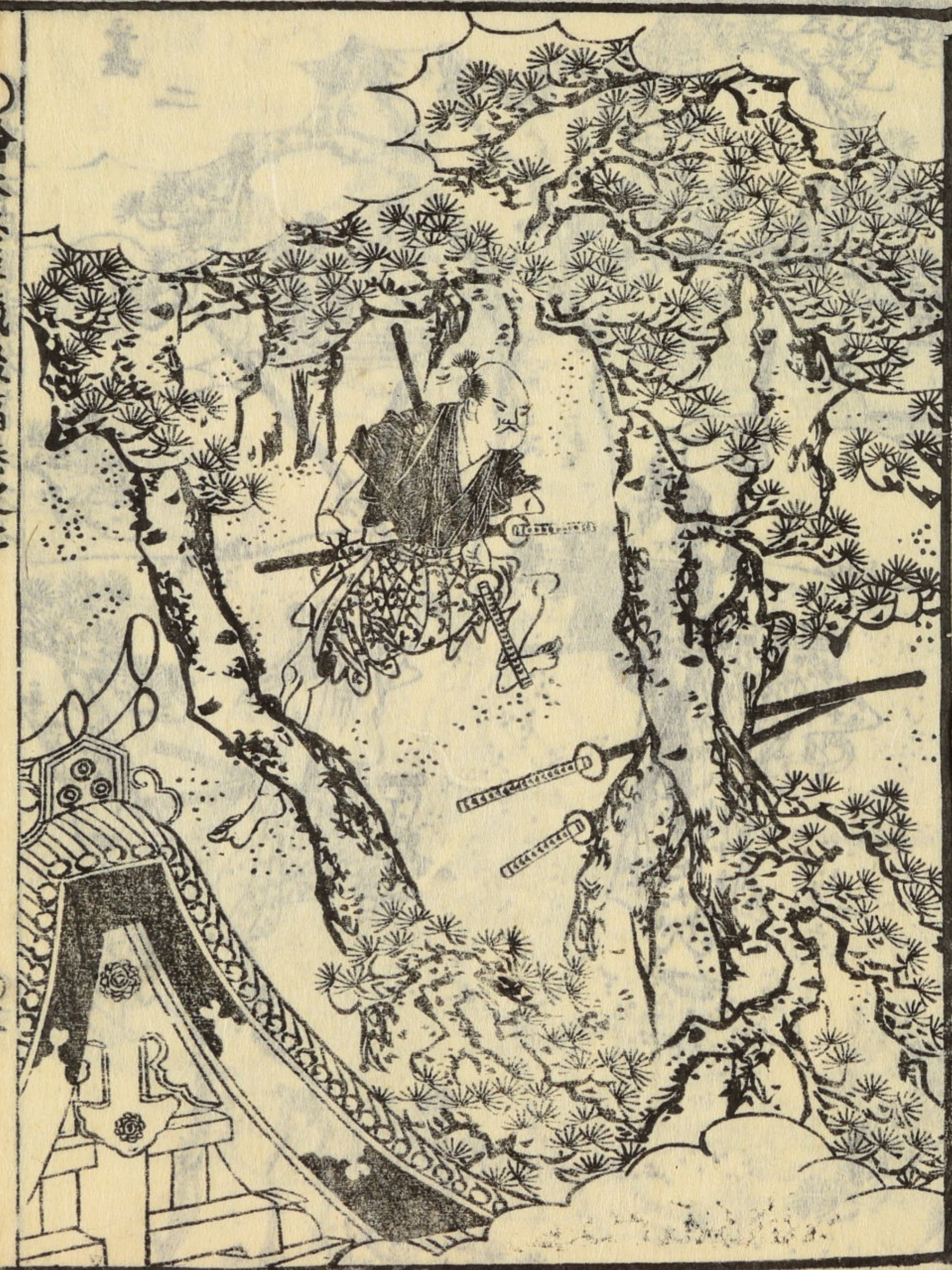
園田即時復叔父宿願

附室園田後宿願

傳又曰る 宿願 復 叔父 宿願 復  
年を過ぐして 宿願 復 叔父 宿願 復  
作も 宿願 復 叔父 宿願 復  
廣海を 通 叔父 宿願 復  
の事か 宿願 復 叔父 宿願 復  
ハ 宿願 復 叔父 宿願 復  
宿願 復 叔父 宿願 復  
宿願 復 叔父 宿願 復  
宿願 復 叔父 宿願 復  
宿願 復 叔父 宿願 復

ちよとあうれ金某未練慥弱そいあしねし道も終  
 のと案とらふよ家初まぬのしとらふとてくねの事論と  
 あり命と考へんハ殊も若く對してのたふね改よ是と  
 りとや武士のき地もおましくしよのびよハはよりそぬの  
 以從がさる不細は其ふとさびて幾まも山鏡しんよ幸あしり  
 よ人もあられ何事穩改よあしとこれしとあしとくは松盤  
 があうと海を造りハりしとらふもあしとくはし一おあ田の  
 よい海もつげいあありしとあはる那智海と築あはれと  
 あともまき香と試んしたよおとさびげしけねよしとらふ  
 よむらり用よし一是罪ま令く勝負を遂くまらしとらふ  
 吃相して法よれハ彩あまらハあし改を押しきたしとらふ

けしとらふしとらふよ金某がしつものし海と田不たよらふ  
 身あし一歳しひも山鏡しとひ山伏せとあはる海へ  
 おうしとらふしとらふよ一替たらしひ布らりしとらふ  
 漢り入し一跡あれハ今ハ獨あ勢もたらしハ滅よそぬの  
 討果えんも雲盤あまらしけしとらふ持とるし一まねくあ  
 あしとらふしとらふよ田たらしとらふもあはる改ハそし  
 べしとらふしとらふしとらふしとらふしとらふしとらふ  
 ちよとらふしとらふしとらふしとらふしとらふしとらふ  
 切りとらふしとらふしとらふしとらふしとらふしとらふ  
 ちよとらふしとらふしとらふしとらふしとらふしとらふ  
 の切先彩あまらハあしとらふしとらふしとらふしとらふ



松野の  
いっかつ  
入瀬を  
害い  
い

糸本忠臣傳巻之六十一



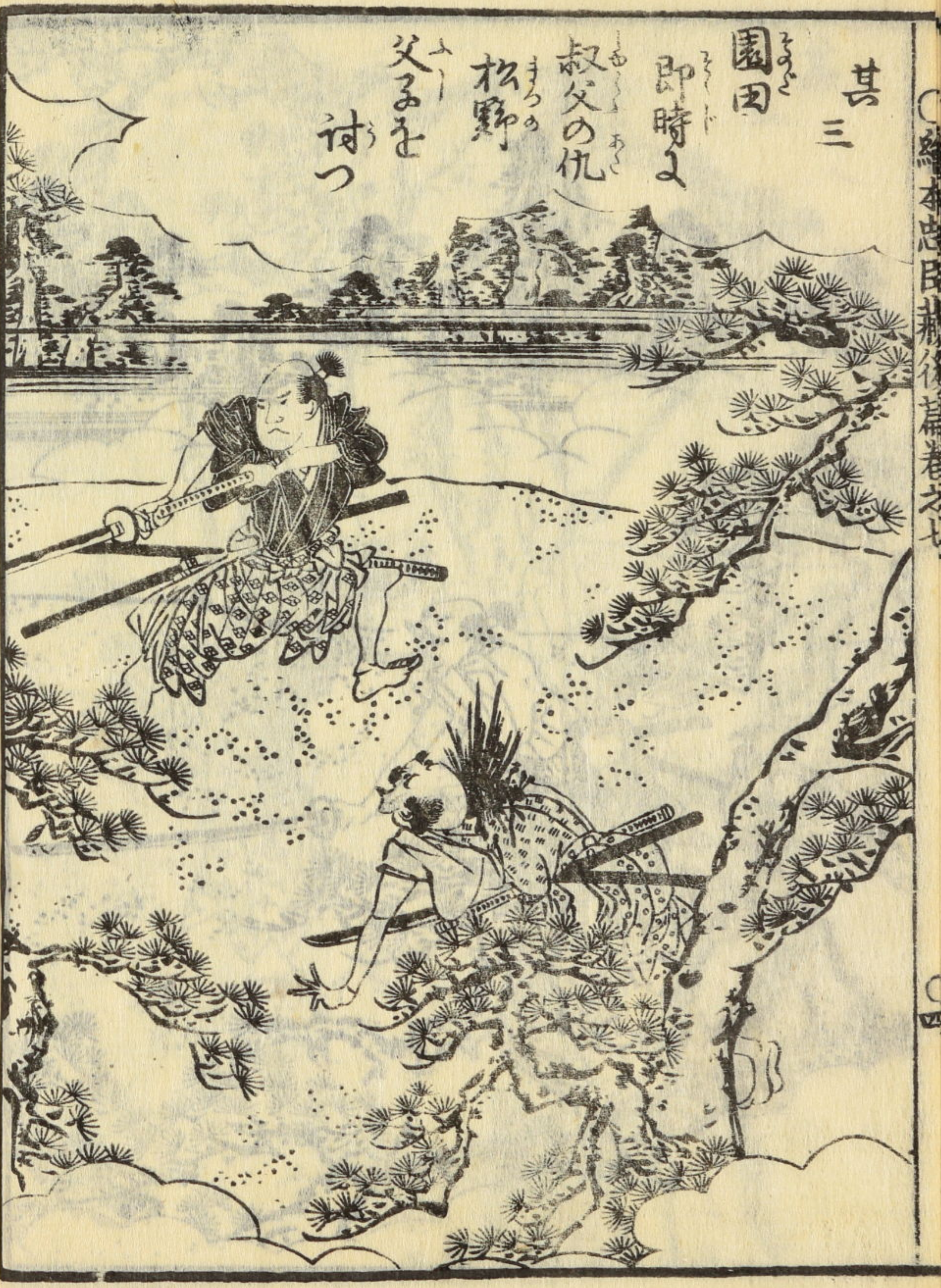
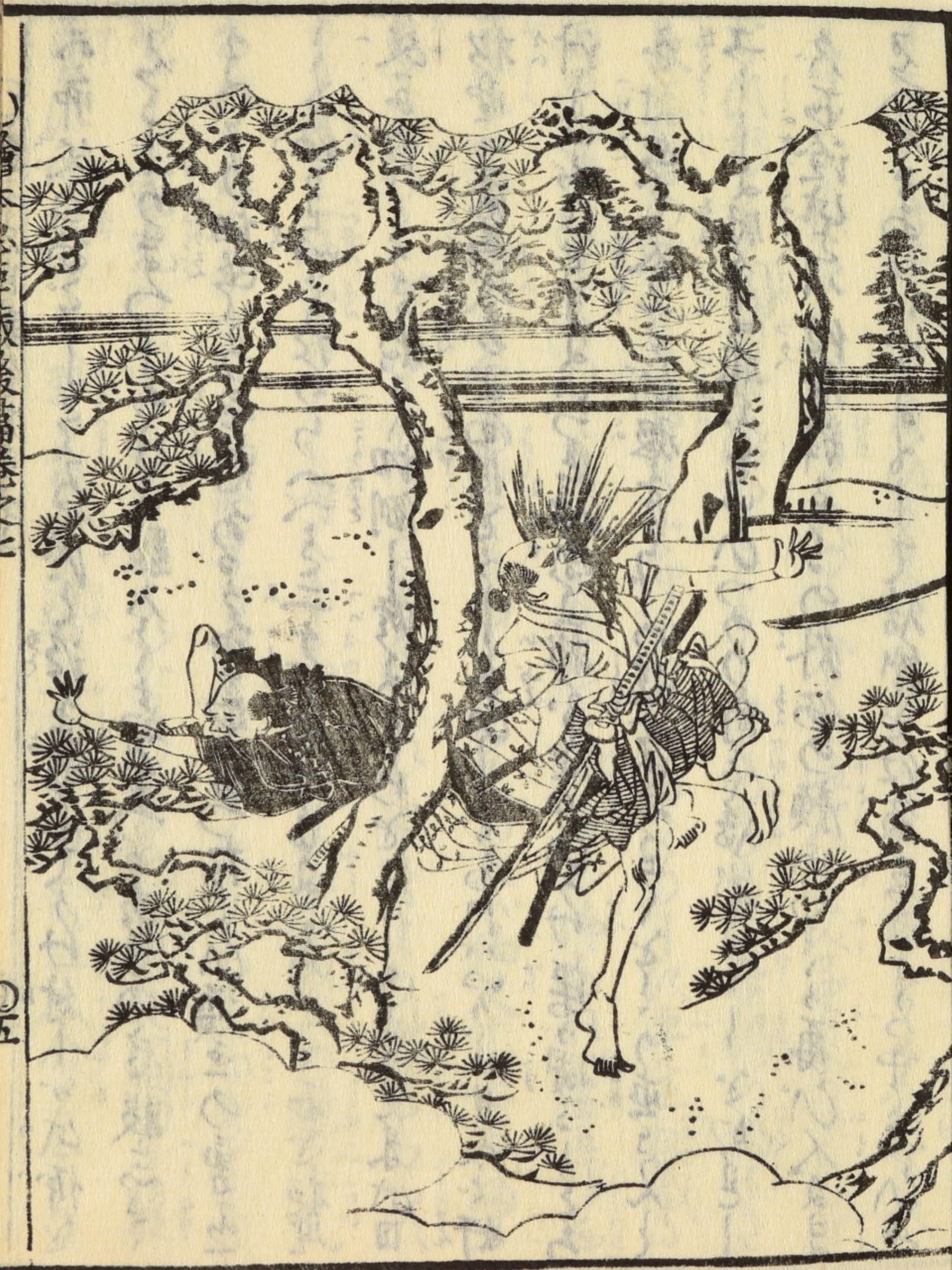
其  
三



其  
二

繪本忠臣蔵後編卷之七

三



其  
 三  
 園田  
 即時  
 叔父の仇  
 松野  
 父を  
 討つ

忠臣蔵後篇卷之七

園田

三

七





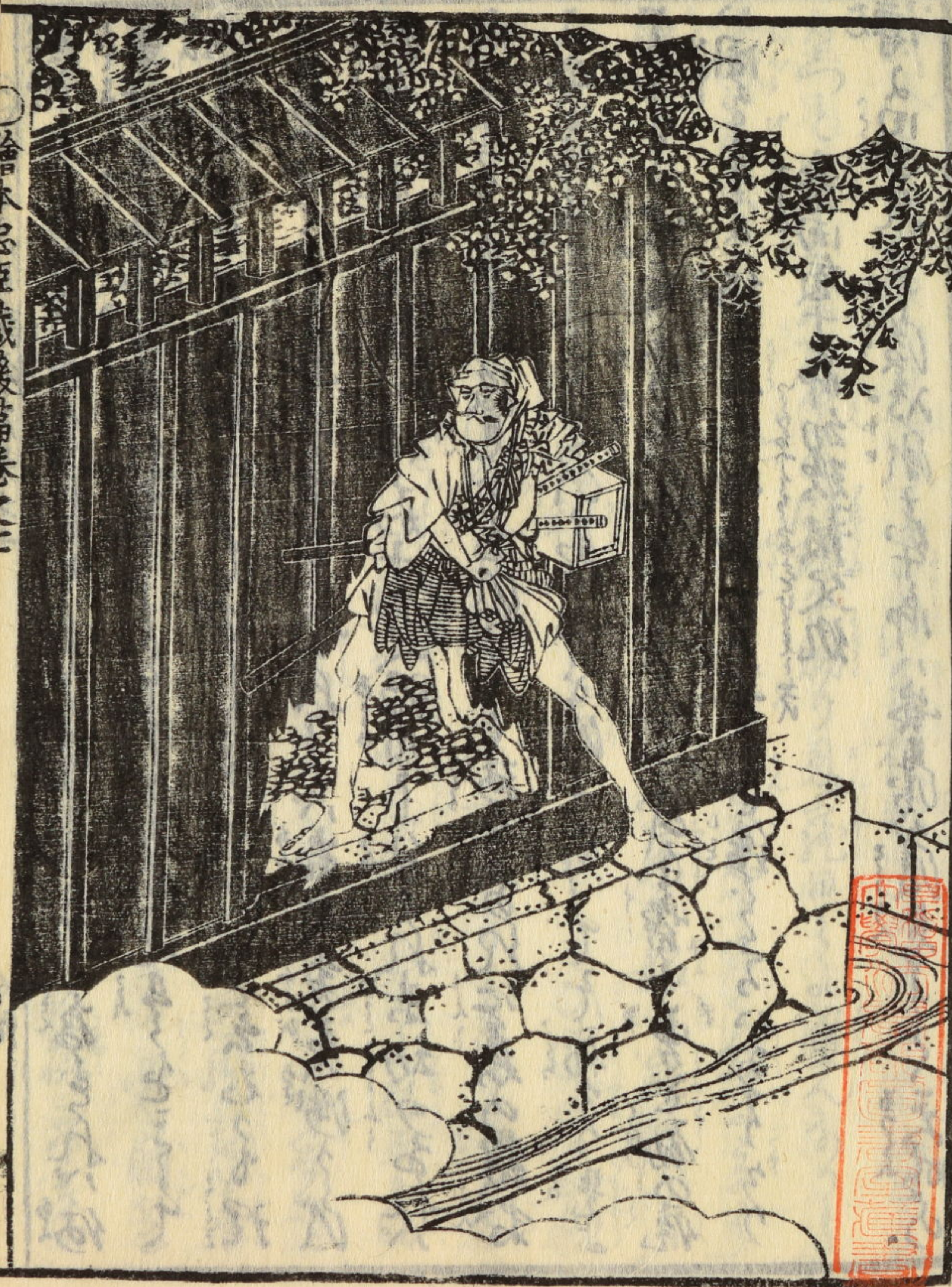
に防がんし父をさす目くらをせー一なる扱つてちたさうこれ  
 とさゆゑ安き清くおさこもせびたよおさうたよ六  
 上段下段又切むらび火をさち〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜  
 定ぬ帯の左の腰をおさ〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜  
 是とさ〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜  
 らつ〜切込を力先と序まなう〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜〜〜い〜  
 胸とやぬ〜切ト〜〜名所乃痛もよ新入の眼〜  
 く〜ら〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜  
 とも〜〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜  
 よ〜〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜  
 ち〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜

死骸のあはれあぶら〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜  
 清例は〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 子〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 と〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 せ〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 あ〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 鞆のゆゑに死〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜  
 とも程も餘恨ハ〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜  
 都のさ〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 の子細ハ〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜  
 ち〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜い〜〜

廳そのはたけく一途一吟味ありうらうら田かきも碍く  
の山聴よ連一たよ其孝義と感稱しき續勇とて孝義せ  
らねるうらうらてお田よとるおれ妻勝と山川海一あて  
まよ田よせうけおひごとの名合せらるお田よいお初より  
け一糸とまよ及まよびごうとて大よ勢いこえ各心漸お世  
お人よおの事論ううつてお中よお付と約せし後不存  
義と後勇一お世の知りをも没入せしむる武庸が勇  
官の志ありとて先難有の名お父とて聖なるお速  
家老速川内記が完一けけ及某武運ようあいの

切らわくもせしつてお居と新よはなまあま入りの  
山事減よ方にゆるりるお通ありうらうらとて今お松  
野を越えし件を指しつせと何うおどの指しもるおと  
うまあがくお世とておの事一は十国の現るお十の指し  
け西兩人が平生のゆいもさし理難ぬらるるけけ行てお知せ  
まのうらうらやおの奉むるお一あまお私とてお世せし  
とて罪よ指しおひらあまおおの事おの事おの事おの事  
振むるの目もあまお新よおの事おの事おの事おの事  
果世勤切の役もあまおおの事おの事おの事おの事  
と新造せしむるおの事おの事おの事おの事おの事  
某へつておの事おの事おの事おの事おの事おの事

繪本忠臣蔵後篇卷之七



此平清  
主家の  
用合を  
盗え  
寺岡  
を  
電  
の



繪本忠臣蔵後篇卷之七

走り下りたる所集が頂戴せしより厚き思ひおぼせられたる何  
 事付も下流に披露せしむるごとく内紀もさしをて  
 大に感し申す事軍に切りしはさしをてさしをて  
 ようありしを速大身より入れしは尚更其後さしをて  
 別館の色をさしをて侍は十帝(徳用)付れ未初めれば  
 成人のるは安房後見とありしはさしをて  
 よ安房後見とありしはさしをて後見ありしはさしをて  
 寺田者十師初教報父仇  
 傳と曰されは後見の師ハ安房後見とありしはさしをて

武人ともありけり物もよきは是利昭近のちよ遠山三三  
 ちよといふ所の二百中の地球を賜り恩を絶日よ盛んありし  
 が女ハ貞女とあり言よ入し姫中れ士ハ貞女とありけり  
 清らきもの漢のてく回列の士遠山が流を姫ハ貞女  
 くこれを流しきよは利教をけり怒と教一は遠山が流  
 ちよといふ所のものさしをて力ハ女が流(流流)さしをて  
 たてきき 泰山は流を流せしより流者よ け時ま山の流さしをて林平流  
 といふ所の人の改易とせしむるさしをてしきよ己が力さしをて  
 のちよといふ所の利を流しきよの初め申の流功とま  
 けま人の用金とま干流しきよ流しきよ人とする如し朋家  
 の士よ 一巻之目録

くまの山を離れて馬を馳せしむるに  
きつんとて平高なるやうに  
ほなる何とて人なほあかき寺田と月掛け  
切てきとていぢりも抜合せ給は  
いりやうとておのり極の柱をくくさるも  
あはよとてあつた老樹の柳の腰をく  
まゝ一肩を甲尻切りしれしうららく  
あゝもめきはあわらけし人もな  
何とてあゝ也然しやねりあか  
集はるはほと誰かきりめのもあ  
愛はるしにの時刻あればあかき  
の使者を待せしむるに寺田柱の  
これに候しむるにいづも宅はあ  
あはれといふまゝと下程はあはれ  
が正敵も百符務まゝいひて  
おどろきやうらけけ付を改むるに  
まても何者の仕事もやと衣穿  
一用金銭失せると林平高の知  
うゝひあしに何とてあはれ  
あはれとて子孫十市高年とて  
人及び知者と守護一因族  
あはれを知らぬあはれとて  
あはれ

の使者を待せしむるに寺田柱の  
これに候しむるにいづも宅はあ  
あはれといふまゝと下程はあはれ  
が正敵も百符務まゝいひて  
おどろきやうらけけ付を改むるに  
まても何者の仕事もやと衣穿  
一用金銭失せると林平高の知  
うゝひあしに何とてあはれ  
あはれとて子孫十市高年とて  
人及び知者と守護一因族  
あはれを知らぬあはれとて  
あはれ

一勢注沈く乍ら齒をくひきりて絶入らる人ありてはなほ  
よ介抱しやうくうく息を推らよおのひつらうこ  
なれば狂気のぞくはたらくおの平清源とて刀を振振  
くひらぐと制とていづもけをうかうかこは怒りこめらるは  
枯ハ何とありやとぼりしてぞ歌とハけりせらるあつた  
法士も不使よハありども一方ありぬ彼のはる名跡は官使  
の入来は間もあらねど寺田の平助は合して介抱せらやうく  
いあざらうくやうりのうくせ終は感愛をこてとてお  
のこくがなぬぐは難敷とてうらハあよるうくしては十師ハ  
まら新絶の初あれば融討の形連ハけりねどもひらうは枯が  
有るをば採らうとてけあまあり

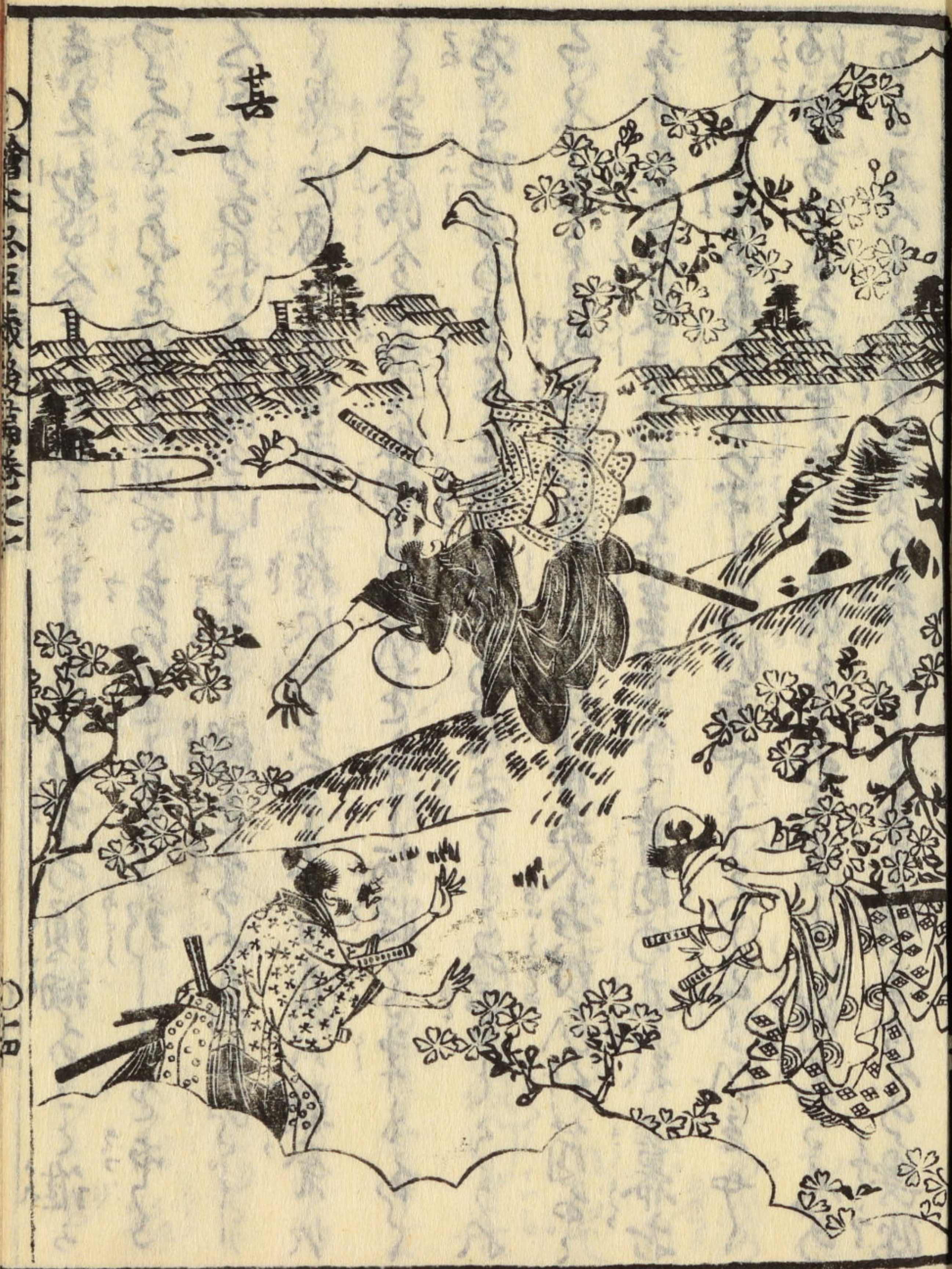
堀井妻子貴花遇危難

傳は田又ハ林平清ハも面とちつを討く遊電一掃く  
怒意の方いあせよ有るありて終くも世をわらうは  
あま家の用令を奪入明軍を討くまらるこい  
改めまら改易とあれば難うまらてこわを味せん  
とれば馬利あより外らうらよこまら一且も面が一族  
今ハまののま治人あれば西谷融討の形とてハけりあは  
う又いこまを秘らよもは十師ハ子腕のて平  
竟思もよたよのあこまら控く奪ひ金もあ  
くおをを求らよもあな捧あ一汲柄の抱ちとあ  
してありたらがさびが懲罪の深余あればまき山也の形絶



坂井が  
妻子  
花を  
賞し  
危し  
難し

繪本忠臣蔵後編卷之七

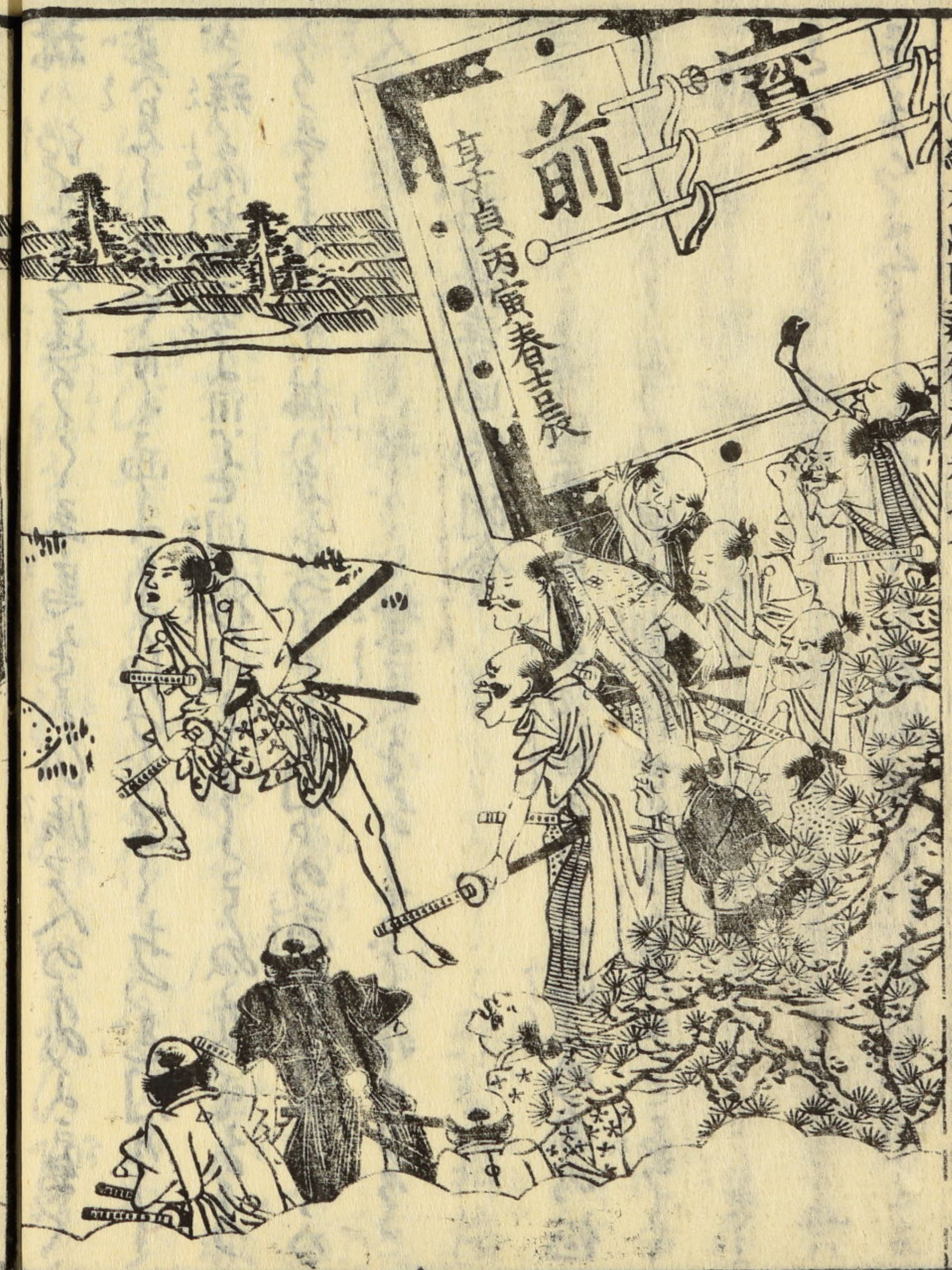












繪本忠臣蔵後編卷之七  
 七



りの平まゝ大は將務ありたるが邪智姦奸のらせりのふ  
目ぞつてくぐらよ思ひのやう今果を討よに易きはは流人  
の年月の目ぞ盗賊のほきまぬがわらへるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
流人あれはトも人の料業ひんひんひんひんひんひんひんひん  
と正一は弱きまうておも辨へあてらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ハは外ある難まうるもは論よりうては父をいふと河  
くまうりーく用命を造りてあてらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
これをもつやあやするおかしき思ひをいひてあてらるゝゝゝ  
もあてらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
そく人そへおしひのすのゝあてらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
これまゆひらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



つく人を欺く人非人けずる人けずる人けずる人けずる人  
けんど勢ひは平唐様もあやむと静ち流一人の山童何と  
悲しくおぼしき人まうて今日あは奉納の品ありて  
勝友の門生をいひてこれなほ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ  
く且神あはけく血まのちん人の悲あつては生木の坊も  
あれが晴有のてハ昨日おねあ一人お田馬場まうて将命え  
はあひあひとまをまうてくまをまうてくまをまうてくまを  
目はわらひて融え通へるまうてハあはれども楽まうてく  
坊西招あはれはむあてらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
りや林が座まあ人もらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
後ひり宿あまうてはあてらるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

終身忠臣補後篇卷之七

R. 211

let B

Handwritten text in a vertical column on the right edge of the page, possibly a library or collection stamp.

Main body of handwritten text in a cursive script, likely a letter or a manuscript page. The text is written in a dark ink and is somewhat faded.

云々人々  
法本右臣蔵後著書也

W 44262

